CLOSE-UP INTERVIEW

元Jリーガー／横浜マリノス株式会社 経営企画部 外池 大亮さんに聞く

［聞き手］外川 智恵さん 大正大学表現学部教授

ポジショニングを重視して積み重ねてきたセカンドキャリア

とのいけ・だいすけ
1975年生まれ、神奈川県出身。早稲田実業学校高等部卒業後、早稲田大学へ進学。早稲田大学ア式蹴球部で活動後、1997年にJリーグのベルマーレ平塚に加入。横浜F・マリノスなどへの移籍を経て2007年に現役を引退。電通、スカパー！に勤務後、早稲田大学ア式蹴球部監督に就任。2023年より横浜マリノス株式会社経営企画部。

クラブのフィロソフィーを具現化するために

外川　本日は、新横浜にある横浜マリノス株式会社に来ています。お話を伺うのは、経営企画部の外池大亮さん。早稲田大学を卒業後、1997年にJリーグのベルマーレ平塚に所属して活躍。その後、横浜F・マリノスなどを経て、現役引退後は、電通とスカパー！でセカンドキャリアを積み、現在に至ります。また、2018年からは出身大学である早稲田大学ア式蹴球部の監督も務めました。今回は外池さんに、学生時代から今のお仕事まで幅広くお話を伺います。今日は爽やかなブルーのポロシャツを着られていますね。お仕事をされる時はこういうスタイルが多いのでしょうか。

外池　横浜F・マリノスのチームカラーが、赤・白・青のトリコロールなので、ブルー系の色の服を着ることが多いですね。あらためて、チームカラーというものを意識するようになりましたし、この色を濁らせることなく、より輝かせていかねばならないと気を引き締めています。

外川　組織になじむことを大切にされているのですね。身に付けられている社員証の裏側には横浜F・マリノスのクラブ・フィロソフィーが書かれているそうですね。

外池　僕が入社する前の2022年に、クラブ創設30周年を機にフィロソフィーを作りました。Jリーグに所属する一つのクラブとして、横浜F・マリノスに関わる人たちが共有し、定着すべき考え方として、ミッション、ビジョン、バリュー、カルチャーの4つを明文化したものになります。

外川　ミッションとして、「〝喜怒哀楽〟にあふれる豊かな体験を提供し続ける。」とあります。

外池　スポーツには勝つ喜びもありますが、当然、負けて悲しむ時もあります。勝つことはもちろん目指しますが、そこには楽しいことだけではなく、喜怒哀楽全てを含む体験を、サッカーを中心とするさまざまな取り組みを通じて共有、共感し、提供していくことに価値を置いているのがポイントだと思っています。

外川　喜怒哀楽の全てを感じることで人生が豊かになり、人として成長できるように思います。

外池　5年間、早稲田大学ア式蹴球部の監督を務めましたが、頑張って挑戦してもエラーが出てしまうことは当然あります。しかし、そこから学んで次につなげていくこ

とを大切にしてきました。その点では、監督として持ち続けてきたポリシーと相通じるものを感じています。

外川　「人々や社会に〝夢〟と〝活力〟をもたらす存在になる。」というビジョンを掲げられていますが、外池さんはそれをどのように具現化していこうと考えているのでしょうか。

外池　プロスポーツは、「プロサッカー選手になりたい」といった子どもたちの夢の上に成り立っています。ですから、ピッチで素晴らしいプレーをするだけではなく、試合後のインタビューや練習している姿からも、子どもたちに夢を与えなければならない。そうした存在であることを、まずは選手が自覚することが大事だと思います。また、一番表に立つ選手や監督だけではなく、現場のスタッフも含めたクラブ全体でスポーツの価値を伝えていくこと、さらにはファン・サポーターやパートナー・スポンサー、地域の皆さんをはじめとした多くのステークホルダーの方々とのつながりを意識しながら一つ一つの業務を行うことが、ビジョンの具現化につながると考えています。

外川　2023年4月から横浜マリノス株式会社に入社されてまだ半年ほどですが、すでにクラブのスピリットがなじんでいるように感じます。

外池　そう言っていただけるとうれしいです。実際にはまだ試行錯誤の連続ですが、クラブの歴史や文化をしっかり学んでいきたいと思っています。入社したばかりとはいえ、僕は横浜F・マリノスとは深い縁があるんです。1985年に、横浜F・マリノスの前身である日産自動車サッカー部が、日産サッカースクールを創設したのですが、僕は小学生の時、選抜コース「プライマリー」の1期生だったんです。それまで地元のクラブでサッカーをしていたのですが、日産サッカースクールで初めて自分のテリトリー外の指導者や選手たちと出会い、サッカー観が大きく広がりました。プロになってからも、2000年から3年間、横浜F・マリノスに在籍してプレーしたこともあり、僕にとっては特別なクラブなんです。

外川　選手として横浜F・マリノスに所属していた時も、やはり特別なクラブだと感じていらしたのですか。

外池　横浜F・マリノスは当時から常に優勝争いをしているような強いチームで、日本代表に選ば

外川 智恵さん

れる選手も多く所属していました。そんな中で、自分は付いていくのに精一杯でしたが、その分、鍛えられましたし、視野が大きく広がりました。

プロへの扉が開いたと感じた瞬間

外川　Jリーグで活躍され、現在も横浜F・マリノスでサッカーに関わるお仕事をされていますが、子どもの頃、プロ選手になりたいと夢見たり、サッカーで生きていけるという感覚はあったのでしょうか。

外池　小学生の頃は、まだJリーグも発足していませんでしたから、将来の夢も、「プロサッカー選手になりたい」ではなくて、「サッカーがもっとうまくなりたい」くらいのものでした。ワールドカップの存在は知っていましたが、日本は一度も出場したことがありませんでしたし、そもそもプロリーグもなかったので、想像もできませんでしたから、無縁なものだと思っていました。サッカーで生きていけるとは全く考えていませんでしたね。むしろ親からは「サッカーやっていても生活をしていけない」と言われていました。

外川　将来を本格的に考える時期、高校3年生の時にJリーグが発足しましたが、Jリーガーを目指そうと思われたのでしょうか。

外池　それも全くありませんでした。僕がいた早稲田実業学校高等部は、サッカーで一度も全国大会に出たことがありませんでしたから。ただ、早稲田大学のサッカー部と同じグラウンドで練習する機会があり、全国から集まった優秀な選手たちのプレーを目の当たりにできたので、さらに上のレベルのサッカーを意識するようになっていました。

外池 大亮さん

外川　では、サッカーを職業にできる、Jリーガーになれるのではないかという手応えを感じるようになったのはいつですか。

外池　正直なところ、大学4年生の時、ベルマーレ平塚からオファーをもらうまではJリーガーになれるとは思っていませんでした。1年生の時から試合には出ていましたが、全国から素晴らしい選手が毎年入部してきますから、常に誰かに追い抜かれるのではないかと不安でした。危機感から来る学びや成長もありましたが、そんな状況でし

たから選択肢として就職活動もしていたんです。オファーを頂いて初めて、プロへの扉が開いたと感じました。

外川　プロになることを目標に努力されてきたと思っていましたので、就職活動をしていたとは驚きです。

外池　もちろん、サッカーが大好きで、もっとうまくなりたい、試合で勝ちたいという気持ちで努力してきましたが、単純にプロになることを夢にはできませんでした。なぜなら、Jリーグの盛り上がりの裏で、試合に出られなかったり、伸び悩んだりして苦しんでいる先輩の姿も見ていたからです。Jリーグは華やかな世界に見えますが、やはり光の部分と影の部分がある。ですから、プロになることに対しても慎重に考えていました。

外川　大学生の頃からサッカーと真摯に向き合われていたのですね。

外池　僕は早稲田大学を卒業したということもあって、ベルマーレ平塚でも選手会長を任されるなど、優等生的な姿を求められる立場にいました。しかし、所属3年目にチームの成績が思わしくなくなった時、もうこの悪い意味での優等生キャラから脱却したいと思うようになりました。そこで、髪を脱色して金髪にしたんです。すると自分の中で何かが吹っ切れたのか、すごく活躍できるようになりました。ただ求められることを真面目にやるだけではなく、自ら何か突き破っていくことも大事なのだとプロになってから実感しました。

ベルマーレ平塚に同時期に加入した中田英寿さんは、監督から休むように言われても「僕は世界を目指しているから」と簡単にはねのける。そうしてブレークスルーを続けていった。上下関係やチームプレーも大事ですが、突き抜けるにはそうした姿勢も必要なのだと学びました。

学生の主体性と発信力を育む

外川　早稲田大学ア式蹴球部の監督として、そうした現役時代の経験をどのように生かしてこられたのでしょうか。

外池　Jリーグの経験もそうですが、現役時代にオフシーズンを利用して、企業でのインターンシップを経験したり、その後、電通やスカパー！といった企業に勤めた経験も指導に反映させました。大学時代は、その先にある長い社会人生活に入る前の最後の環境です。だからこそ、大学において社会との接点をどのように作っていくかが大事になります。そこで、僕が取り組んだことの一つが、情報発信力の

強化です。昔と違ってSNSなどのツールが発達しているので、部活動での取り組みや試合の情報などをどんどん自分たちで発信していける。そうすることでまるでインターンシップのようにサッカー界や社会との接点が生まれますし、自分をアピールすることもできる。大学サッカーからプロ選手や日本代表選手をより多く輩出することも目標にしていたのですが、その点でも情報発信力を高めることは重要だと考えました。

外川　外池さんならではのとてもユニークな取り組みですね。

外池　監督就任当時、世の中ではSNSの投稿が炎上するなど、情報発信に気を付けなければという空気がまん延していましたが、そうするとどんどん萎縮していって、大学サッカー界が村社会化してしまう。だからこそ、学生が主体的に情報発信し、状況を打ち破っていくことが必要だと思ったのです。そこから得た経験は必ず大きな糧になりますから。

外川　私自身の経験からしても、学生が主体性を持つことはとても大切だと思いますが、受動性を持たせることとのバランスがとても難しいと感じています。外池さんはそこをどのように指導されていたのでしょうか。

外池　僕自身も難しさを痛感してきました。確かに主体性を履き違える学生もいましたが、その場で「それは間違っている」と正すようなコミュニケーションの仕方は極力避けるようにしていました。「どうしてそういう判断をしたのか」、「別の考え方もあるんじゃないか」ということを尋ね、最終的には学生本人が決断を下せるような流れを作っていったのです。監督在任中にはコロナ禍となり、学生も苦しい中で活動していました。僕自身、コロナ禍への対応で果たしてこれが正解なのかと悩んだこともあります。ただ、そうした中でこそ、失敗してもそれを生かして挑戦する姿勢を大人が示さなければならないと思いました。僕が学生を見ている一方で、僕も学生から見られているのですから。横浜マリノスに転職することも大きな挑戦でしたが、学生たちに新たな道へ進む姿を見せることも、僕にとっては大事なことでした。

独自の経験を糧に見いだしたポジション

外川　外池さん自身、そうして引退後のセカンドキャリアを積み重ねてこられたわけですが、新しい世界に飛び込む

ことに対して迷いや悩みはなかったのでしょうか。

外池　僕はサッカーでポジショニングを大切にしてきました。サッカーで得点できたり、失点したりするのは、本来そこにいるはずの人がいないというように、ポジショニングが崩れて隙ができた時なのです。スタメンかサブだけではなくメンバー外という立ち位置も含めて、サッカーではいろいろなポジションを経験してきましたが、僕は決して特段スピードがあるわけでもなく、またドリブルなどボール扱いに優れた選手ではありませんでした。しかし、常にポジショニングを考えてチャンスを作ることを意識してきました。そこから生じる局面の変化や意外性に、サッカーの醍醐味を感じていたんです。サッカーの世界から離れてもそのスタンスは変わりません。

セカンドキャリアを考えた時、企業で社会経験を積んでこなかったことは弱みかもしれませんが、11年間、Jリーガーとしてプレーをしてきた経験は、他の人にはない強みになる。それを使って、社会のどういうフィールドで、どんなポジションを取っていくのか。この会社で仕事をすれば、もしかしたらすごいパスが飛んでくるかもしれない。そう考えるとワクワクしてきましたね。早稲田大学の監督の話が来た時もそうです。サッカー以外に社会で広く経験を積んだことは、必ず大きな武器になると思いました。

監督として戻った早稲田大学での学び「集り散じて 人は変れど 仰ぐは同じき 理想の光」

外川　さまざまな経験をされて、あらためて今、〝大学〟に対して感じていることがあれば教えてください。

外池　早稲田大学でサッカーに励む中で、自分のフィールドが地元という狭い世界から日本全国に広がっていきました。Jリーグに入ってからの広がりもその延長上にあったように感じています。しかし、一時期は早稲田大学というカテゴリーに縛られていることに息苦しさを感じていたことも事実です。早くそこから脱却したいという思いもありました。でも、ア式蹴球部の監督に就任してから早稲田大学について熱心に学んだんです。創設者の大隈重信の足跡をたどったり、学生街のいろいろなお店を食べ歩いたり。そんな中で印象に残ったのが、早稲田大学の校歌にあった一つのフレーズでした。「集り散じて 人は変れど 仰ぐは同じき 理想の光」。僕自身も歌詞の通り、早稲田大学に集

まって、散じていったわけです。

監督に就任して間もない頃に、田中総長にお会いする機会があり、「僕は早稲田が嫌になって出ていきました。そんな人間が監督を務めていて大丈夫でしょうか？」と尋ねたことがあるんです。すると田中総長から「そういう人間が、一番、早稲田っぽいんだよね」と返されました。そうした経験があって、早稲田大学って懐が深いのだなと感じました。大学に入って終わりではなく、みんな方々に散って挑戦していく。早稲田大学はそういう場なのだろうと。だからこそ社会に出て、組織の枠や利害関係に縛られたりする中で、視野が狭くなるのを防ぐことができる。学生時代も監督になってからも、そういう環境で学べていたのだとあらためて実感しています。

外川　サッカーで、社会で、さまざまなポジションを経験されてきましたが、自分に一番しっくりくるポジションを見いだせましたか。

外池　難しい質問ですね。やるべきことは見えていますが、ポジションとしては、いまだに模索中ですかね。例えば、ホームで試合がある時はスタッフ総出で運営に当たるのですが、その際、発券や設営などさまざまな業務が発生します。今現在は、その中で僕は〝フリーマン〟として、そこにある状況を広く深く見て感じて捉え、そして考えて、必要であれば手伝っています。サッカーの練習でも少人数で敵と味方に分かれて戦うことがあるのですが、そこに刺激を与えるために中立的にどちらにも関与するフリーマンというポジションがあります。僕はそのフリーマンとしての本物をまず目指したい。もちろん、明確に担うべきこともあるのだと思いますし、だからこそ今は、そのポジションを生かしたいと思います。

外川　働き方のスタイルとしてスペシャリストか、ジェネラリストかとよく言われますが、私はスペシャリスト的な部分がないとジェネラリストにはなれないと思っています。その点、外池さんはサッカーという軸があるからこそ、着地点が見えていて、フリーマンとして目が行き届くのではないかと思いました。

本日はありがとうございました。